

2014 アジア大会ボート競技（韓国、忠州）審判報告書

FISA 審判委員、FISA 国際審判員

日本ボート協会国際委員長

千 田 隆 夫

はじめに

第 17 回仁川アジア競技大会のボート競技は、9 月 20 日（土）～25 日（木）の 6 日間、韓国・忠州市の Tangeum 湖国際ボートコースで開催されました。この報告書の作成が大会終了から 4 か月も後になってしまっていて、大変申し訳なく思っています。既に Rowing526 号（2014 年 10・11 月号）に詳報が掲載されていますが、日本は軽量級男子ダブルスカル（LM2x）で金メダル、軽量級女子ダブルスカル（LW2X）と男子エイト（M8+）で銀メダルと、エントリーした 3 種目すべてでメダルを獲得しました。

私はこの大会に審判員として参加しましたが、この報告書では、審判報告書であるとともに、国際委員長の責任上、最近の国際大会の傾向、アジアボート界の現状、そして日本とアジアボート界との関係にも焦点をあててみたいと思います。



表彰式で銀メダルを受ける日本 8+クルー。隣の金メダル中国クルーとの身長の違いに注目。

審判から見た国際大会

今回の国際審判団は総勢 15 名で、審判長は ARF 審判委員長の Chen Chunxin 氏（中国）でした。審判長以外の国構成は、中国、韓国、香港、台湾、フィリピン、タイ、ミャンマー、シンガポール、インドネシア、インド、パキスタン、ウズベキスタン、イラン、日本から各 1 名ずつでした。アジア大会はアジアの中では上位に位置づけられている大会なので、そこに参加する審判は中堅～ベテランが主で、まったく初めてという人はいませんでした。Technical delegate は FISA イベント委員長の Mike Tanner 氏。審判試験とセミナーの実施が主目的ではありましたが、FISA 審判委員長の Patrick Rombaut 氏も、大会前半の運営に協力していました。以下、オムニバス形式で、日本国内の大会ではあまり経験しない（＝国際大会ならではの）ことがらを報告します。

1) TV 中継

今大会のすべてのレースが TV カーによって中継されました。遠隔地にまで“放映”されたかどうかは知りませんが、スタンドに向かって設置された巨大モニターにはスタート前の各クルーの表情からレース中の必死の表情、そして観客の目の前で繰り広げられる Finish 直前の競り合いの映像、さらにはメダル・セレモニーの様子まで、すべて“生放送”で映されていました。「ボートのレースは最後の 500m しか観ることができない。」という観客の不満（これがボートを不人気にする大きな要因）は、この大会では完全に克服されていました。TV カーは 2 台で、コースに接した TV カー専用道路を往ったり来たり。Starter はスタート前には、TV カーが来ているかどうかを確認してから号令をかけます。最終日の Final

A のレースの後にはメダル・セレモニーがあるので、それが終わるまでモニター画面はセレモニーで占領されてしまい、たとえ次のレースの発艇時刻が来ても待たなければなりません。Finish の隣にいる審判長とセレモニーポンツーンにいる Tanner 氏から、頻繁に Starter に指示が飛ぶ、「スタートを 1 分遅らせろ。」「新発艇時刻は〇時△分にしろ。」……。スタート前に艇の故障がおきれば、Starter はスタートが何分遅れるかをすぐに予測して審判長⇒TV コメンテーターに伝えます。待ち時間に何を“上映”するかを、TV コメンテーターが瞬時に決める必要があるからです。クルーよりも「観客（視聴者）重視」の風潮は最近の国際大会では顕著です。レガッタはショーなのか……。



最終レース(M8+)終了後のセレモニーの後方を主審艇が一行に並んで行進する。裏方の審判も“ショー”に協力する……。

2) Moving Umpire か Static Umpire か？

ここ 2,3 年、FISA 国際大会では“Static Umpire（静止した主審）”導入に向けたトライアルが、盛んに行われています。1 ハイの主審艇がレースを追いかける方法（Moving Umpire）だと、レースの追航および回漕の際に“引き波”が生じ、次のレースに影響します。これを防ぐために、数ハイの主審艇を一定間隔（通常 250m）ごとにコース外に配置し、止まったままレースの進行をチェックするのが“Static Umpire”です。“Static Umpire”では主審艇は止まっているので、“引き波”問題は起こりません。このコースで前年（2013 年）に開催された世界選手権でも、“Static Umpire”が試行されました。しかし、今回のアジア大会では従来からの方法“Moving Umpire”で行われました。FISA で“Static Umpire”の方法を確立させ、FISA Rules を改訂してから、世界に普及させるという方針によるものと思われます。現行の FISA rules では、“Static Umpire”は世界選手権とワールドカップに限定されています（第 97 条）。FISA では“Static Umpire”の問題を非常に重視しており、この問題の議論だけで Council（評議会）を丸一日費やしています。「審判の配置のことだから審判に任せればよい。」とはせずに、審判はもっとも重要な「安全と公平」を担保する役割を担っているのです。審判業務の運用は FISA 全体で考えるべきだ、という考えによるものなのです。日本でも審判業務に対して、審判以外の人たちがもっと関心を持ち、積極的に意見を述べて欲しいと思います（審判長席への“怒鳴り込み”は言語道断！）。

3) Attention と Go の間隔

国際大会では、毎日レース後にチームマネージャーミーティング（TMM）が開かれます。ある日の TMM でカザフスタン（KAZ）のコーチが「今朝の Starter の Attention と Go の間隔は長すぎる。」と苦情（？）を述べました。その Starter は私です。私は Attention と Go の間隔を、意図的に 1 レースごとに変えています。短い場合は 2 秒程度ですが、長い時は 5 秒以上のばすこともあります。これはクルーに Go のタイミングを“予測”させないためです。“予測”による見切りスタートは、不正スタートです。スタートとは「赤から緑へのランプの変化」あるいは「ブーという音」にいかにか早く反応するかであって、その能力を競っているのです。“予測”する能力を競っているではありません。したがって、FISA ルールには「Attention と Go の間には明瞭、かつ一定でない間隔を設けること。」という規定があ

ります。このような説明によって、KAZ のコーチは納得しました。日本の選手とコーチのみなさん、このことを是非知っておいてください。そして、間隔が短くても長くても、瞬時にスタートできるような練習をしてください。

4) ソックスの統一

ユニフォームを統一することは世界でも日本でも同じですが、それをどこまで徹底させるかについては、日本はまだ甘い、と言わざるを得ません。その代表がソックスです。Assistant Starter は双眼鏡で、発艇位置についた各クルーのユニフォームをチェックしています。ロウイングスーツや帽子は皆統一してきますが、ソックスが統一されていないクルーは時々います。今回のアジア大会ではスタート前のクルーを前から TV で撮っていて、それがアップで観客席前の巨大モニターに映し出されていました。そこでソックスの不統一が観客にもよくわかるのです。“統一性 uniformity”を何よりも重んじるロウイングにおいて、観客に“不統一”を見られてしまうことは屈辱です。さっそく Control Commission (監視) に、出艇時のソックスチェックの徹底が指示されました。監視のチェックをくぐり抜けて、スタート前にソックス不統一が発覚したクルーには、“reprimand (注意)”が与えられました。

さらに、国際大会では“ユニフォームの統一”はレース中だけではありません。表彰台でも“ユニフォームの統一”が義務付けられているのです。もしメダルを受けるクルーが不統一のソックスを履いていたら、表彰式の前に係員が「全員ソックスを脱いでほしい」と指示します。“不統一のソックス”よりも“統一したはだし”の方がまし、というわけです。日本ではここまではしませんね。でも、“一糸乱れぬ漕ぎ”で勝ったクルーのソックスが“色柄違い”だったら、何か興ざめしませんか？ルールがどうのこうのということではなく、「ボートの魅力とは何なのか。」という本質的な追究をすれば、おのずとあるべき姿はわかると思います。

5) 選手計量後にパンの支給

軽量級種目の選手にとって、勝負はレース中だけではなく、選手計量までは“空腹”という強敵との闘いを繰り広げています。計量をパスした選手達は、そこでようやくその日初めての食事にありつきます。この大会では、計量後の選手達に「1人2個」のパンが支給されました。OC のいきな計らいに、選手たちは大喜びです。韓国内のパン会社がスポンサーになったのですが、とことん空腹状態の選手たちは「こんなおいしいものはない。」と感じたでしょう。スポンサーにとってもよい宣伝になったと思います。次回、日本で国際大会を開催する時



皆が注目するメダルセレモニーでは“ユニフォーム統一”は厳守。ソックスまで揃ったクルーは、誰の目にも「強い」と映る。この写真はアジア大会とは無関係。



「韓国のおいしいパンはいかがですか……。」
「うーん、どれもおいしそうに見えるなあ……。」

は、是非日本のパン会社にこの話を持ちかけましょう。

6) Practical Start に来ない日本クルー

国際大会の前日には、必ず 30 分～1 時間の **Practical Start** の時間が設定されていて、翌日からのレースと同じシステムによるスタート練習ができるようになっています。これは審判にとっても、機器の操作法や癖を知ると言う意義があります。ところが、私の 20 年を越える国際審判の経験で言うと、「日本クルーは **Practical Start** に来ない」のです。今大会でもやはり、日本クルーは 1 クルーも来ませんでした。なぜなのでしょう？せっかく機会を与えてくれているのに、それを利用しない理由が私にはわかりません。国際大会では、スタートは“光発艇”です。機械なので、どの大会でも同じと思っているのでしょうか？それは違います。ランプの設置されている位置（クルーからの方向・角度・距離）、ランプの色（水面に反射する光によって見づらいことがある）、ブザーの音色・音量など、クルーの認知に影響を及ぼすファクターはたくさんあります。それを事前に知っているのといないのとでは、明らかに有利・不利があります。2 回、3 回と **Practical Start** を繰り返すクルーは、体でそれを覚えます。私は、**Practical Start** に来ない日本クルーは翌日のレースでスタートから出遅れるのではないだろうか、といつも不安を感じています。



スタートを制するために、前日の **Practical Start** を活用して欲しい……。

7) 日本人役員と日本選手団

ボートの国際競技団体の中で日本が加盟しているのは、国際ボート連盟（FISA）とアジアボート連盟（ARF）です。現在、FISA には 3 名の日本人役員（日浦幹夫氏、細渕雅邦氏、千田隆夫氏）がおり、ARF には 4 名の日本人役員（岡本 悟氏、加藤直美氏、叶谷彰宏氏、千田隆夫氏）がいます。さらに、FISA 大会、ARF 大会のほとんどすべてに、1～2 名の日本人国際審判員を派遣しています。これらの日本人役員・審判員の主目的はもちろん、それぞれの大会・競技の運営に協力することです。しかし、あまり知られていませんが、国際大会では、自国出身の役員がいることでその国のクルーが有利になることがよくあります。もちろん、競技の上でのジャッジで、自国クルーが有利になるような取り計らいは絶対にできません。しかし、大会運営上のいろいろな情報（国際大会では予定が変更になることが頻繁にあります）をいち早く正確に伝えてもらったり、何かトラブルが生じた時に（借艇、輸送、宿舎のトラブルが多い）日本人役員が仲介してくれることで現地組織委員会がすぐ対応してくれたり、練習中やレース前に“日本語で”声をかけてもらうことで安心感が得られたり……、といろいろあります。このようなことは間接的ではありますが、レースの成績にも影響を及ぼします。したがって、大会に派遣されている日本人役員・審判員をどんどん利用すべきです。今回のアジア大会では、国際審判として参加した私以外に、大会公認ドクターとして FISA スポーツ医科学委員の日浦幹夫さんが参加していました。二人共 FISA 委員で、国際大会には何度も従事しているベテランです。参加している日本選手団の動向は気になるし、機会あるごとに声をかけました。特に大きな問題はなかったかと思いますが、日本選手団のお役立てたかどうか……。

そういう意味で、大会に派遣されている自国役員は、選手団の一員とみなすべきです。不思議なことに、これまで日本から派遣される日本人役員は選手団には含まれていなかったし、誰が派遣されているのかを選手やコーチはまったく知りませんでした。役員・審判の方も一緒に、選手団とは別のフライトで往復することもあるのか、その大会に派遣されている監督・コーチ・選手を知らないことがよくありました。現地で会っても、同じ日本人同士なのに何かよそよそしくて、他人行儀なのです。他の国は違います。選手もコーチも役員も審判も、同じ国の人たちは皆、和気あいあいとやっています。国際審判の中には、自国の選手団の宿舎に泊まる人もいます。日本では、「審判は公平でなければならないので、選手と話をしてはいけません。審判の宿舎は選手の宿舎とは別。」と長いあいだ“教育”されてきたので、国際大会に出かけて行くと、カルチャーショックを受けます。諸外国は、選手もコーチも役員も審判も皆団結して、自国が勝つために協力していることがはっきりわかるからです。これは不正でもなんでもありません。ナショナリズムと愛国心の自然な発露なのです。日本選手団も、役員・審判も巻き込んだ“オールジャパン”で戦うようにすべきです。意識改革が必要だと思います。



FISA スポーツ医科学委員の日浦幹夫さん(左)と FISA 審判委員の筆者(千田)。2013 年 2 月の FISA 臨時総会(コペンハーゲン)で。

アジアボート界の変容と日本のアジアに対する姿勢

アジアボート界を取り仕切っているのはアジアボート連盟 (ARF) です。ARF では4年ごとに選挙があり、会長、副会長、事務局長が変わります。事務局は会長になった国が受け持ち、会長によって事務局長が指名されます。今回のアジア大会の期間中に ARF 総会があり、会長と副会長の選挙が行われました。オリンピックを5年後に控えた日本は、2度目の会長国を目指して大久保尚武・日本ボート協会会長が立候補されました。結果は、新会長には中国の王石 (ワン・シー) 氏が当選し、副会長にはイラン、シンガポール、台湾、インドネシアの候補が当選しました。

今回の選挙とその前日の ARF 規則改訂の議論を聞いていて、私はアジアボート界の変容を強く感じました。日本はこれまで夏1回、冬2回のオリンピックを開催し、2020年には4回目のオリンピック開催が決定しました。ボートに限定しても、ARF 設立の立役者で、会長国も経験し、アジアで初めて FISA 世界ボート選手権を日本 (長良川) に誘致しています。間違いなく、日本はこれまでアジアボート界のリーダーでした。しかし、過去の実績だけではこれからのアジアボート界を引っ張っていくことは難しいと感じました。大富豪である中国の王石さんは選挙演



2014 年 9 月 24 日、ARF 総会(韓国・忠州)終了後の参加者全員での記念撮影。

説で「資金力」を力説しました。選挙戦でもそれを巧妙にちらつかせて、発展途上国が多いアジア諸国の支持を得ることに成功したようです。選挙後、親しいアジアの友人が率直な感想を語ってくれました。「日本は保守的すぎるよ。それに最近、アジアの大会を重視していないよね・・・。」痛い指摘です。オリンピックでメダル獲得を至上命題とすることに異論はありませんが、そのためにアジアをスキップしてしまうのは、手順が違うと思います。

アジアでは中国が他を圧倒しています。世界のボート強国とメダル争いをしている中国に勝てれば、自ずとオリンピックのメダルに近づきます。それと、昨年戸田で開催されたアジアカップⅠで気づいたと思いますが、“ボート新興国”がどんどん台頭しています。イラン、カザフスタン、ベトナム、インドネシア、香港・・・種目によっては、日本より強いでしょう。アジアチャンピオンを決めるアジアボート選手権に、日本は2回連続してトップクルーを派遣していません。アジアカップⅠ、Ⅱにも、自国開催の昨年を除いて、これまで一度もナショナルクルーを派遣していません。このような事実をアジア諸国はよく知っています。国内大会も数多くある中で、時間的、資金的な困難があることは推測できますが、なんとか知恵を絞って、世界の前にまずアジアに目を向けて、競漕力アップとともに、アジアの隣人たちの信頼を得る努力が必要だと思います。

ARF 総会では 2015 年の大会の開催地が決まりました。アジアカップⅠは 3 月にシンガポールで、アジアインドア選手権は 4 月にタイ・パタヤで、アジアジュニア選手権は 6 月に中国・武漢で（開催時期が変更になる可能性あり）、アジア選手権は 9 月に中国・北京で、そしてアジアカップⅡは 11 月にイラン・テヘランで開催されることになりました。岐阜・川辺町に誘致を目指す 2016 年アジアジュニア選手権は 2015 年の ARF 総会で決定されますが、日本の開催の意向は示されました。“日本のルツェルン・川辺”をアジアに紹介し、きめ細かな“おもてなし”の精神で、アジアの若いボート選手達を魅了したい、と地元では意気込んでいます。誘致に向けて皆様のご支援をお願いいたします。

FISA 国際審判試験の動向

忠州アジア大会中に FISA 国際審判試験が実施されました。今年から FISA 審判委員になった私は、はじめて試験官として審判試験に立ち会いました。今回の受験者は男性 3 名、地元韓国から 2 名とイランから 1 名でした。FISA 審判試験には筆記試験と口答・実技試験があり、筆記試験に合格した人だけが翌日の口答・実技試験に進みます。筆記試験といっても、問題はすべてパソコンからプロジェクターでスクリーンに映し出され、解答（正解数不定のマルチプル・チョイス）のみ答案用紙にマークするという形式です。もちろんすべて英語で出題されます。しかも各問題は 1 分経過すると次に進み、基本的に後戻りはしないというシステムです。このような試験方法では相当の英語力（速読速解力）が必要です。

今回の受験生 3 名は全員筆記試験で不合格となりました。FISA 国際審判試験は世界各地で実施されますが、アジアの受験生の合格率は欧米の受験生よりも明らかに低いです。これは一つには言葉の問題（試験は英語のみ）がありますが、それ以外には、自国



FISA 審判委員長の Patrick Rombaut 氏による審判セミナー。国際審判の資格更新には、審判セミナーの受講が義務付けられている。

内に国際審判員に必要な知識、技能等を指導できる先任国際審判員が少ないこと、FISA ルールで行われる国際大会を経験する機会が少ないことが大きな理由だと思われます。幸い、現在日本には14名の国際審判員がいます（世界第8位、アジアでは第1位）。経験豊富な先任国際審判員が後輩を指導育成するシステムもほぼできあがっています。「日本のB級以上の審判員は意欲さえあれば国際審判員になれる」と言っても過言ではありません。今後2020東京オリンピックに向けて、益々国際審判員への関心も高まり、受験希望者は増えるだろうと予想します。実際、今年（2015年）の8月21日～23日、全日本大学選手権開催中に、戸田（予定）で国際審判試験を実施することが内定しており、現在6名の日本人審判が受験に向けて猛勉強を続けています。

FISA 国際審判員の直接的な仕事は国際大会での審判業務です。毎年 FISA 大会、ARF 大会あわせて10大会程度の国際大会に日本から国際審判が派遣されます。それ以外に、海外で国際審判として得た経験を日本に持ち帰り、日本ボート界の国際化の推進役となるという重要な役割が期待されます。審判は大会の運営に関わりますので、同じ大会に参加しても、選手やコーチとは異なる“裏情報”をたくさん得ることができます。欧米のボート強国は例外なく、多くの国際審判を擁しています。国際審判の活動を通じて国際大会で有利に戦うノウハウがもたらされ、その国の戦績が向上する。このような効果は確かにあります。国際審判だけでなく、FISA や ARF の役員にも同じことが言えます。国際大会で良い成績を挙げるには、選手を直接鍛える“強化”だけでなく、このような戦う環境を支配する努力も必要なのです。



大会前日の最初の審判ミーティング。左手前は今大会の審判長の Chen Chun-Xin 氏(中国)。

2020 東京オリンピックに向けた日本ボート界の役割

忠州アジア大会には、FISA 新会長のジャン・クリストフ・ロランド氏と事務局長のマット・スミス氏も来ていました。2014年7月の会長就任後、ロランドさんは積極的に各大陸の大会を訪れているようです。今回忠州では、日本ボート協会の大久保会長、木村理事長、細渕オフィサー、叶谷委員との会談が持たれました。2020東京オリンピックのボート競技とそのコースについて、FISAの意向を伝えるのが主目的だったようです。ボートコースやそれに付随する施設群はオリンピックの期間だけではなく、オリンピック終了後も長期間にわたって利用され続け、ボートの発展・普及に役立てて欲しいというのがFISAの日本への要望です。東京オリンピックで使用するボートコースは“Legacy（遺産として長く利用されるもの）”であるべきだ……。これはボートだけでなくオリンピック全競技種目に共通の方針で、“2020オリンピック・ムーブメント”として、世界オリンピック評議会（IOC）が提唱しています。今後この趣旨にそって、東京オリンピックのボートコースの設計と建設が進められることになるでしょう。

ボートは歴史が古く、ヨーロッパでは高い人気とステータスを維持しているスポーツです。常にオリンピックの競技で有り続けてきました。しかし、同じく伝統的なスポーツであったレスリングが、一時オリンピック競技から外されたことは、ボート関係者にも衝撃を与えました。改革と発展への努力を怠

っていると、伝統あるボートも同じ憂き目に遭うかもしれない……。FISA は世界のスポーツ界の趨勢に乗り遅れないよう、IOC の動向に細心の注意を払っています。5 年半後にオリンピックを開催する日本は、IOC あるいは FISA の意向を具現する当事者です。日本ボート界は自国のメダル獲得のことだけでなく、ボートの発展の責任を背負う立場にあります。国際スポーツ界の情勢に最大限の関心と注意を払っていくべきでしょう。

おわりに

4 年ごとに開催されるアジア大会、次回は 2018 年にインドネシアで開催されます。2020 年東京オリンピックまで 2 年を切った頃です。2018 年インドネシア・アジア大会で勝てなければ、2020 年東京オリンピックでのメダル獲得はとても無理でしょう。繰り返しますが、アジアを軽視してはいけません。アジアに貢献し、アジアで勝つことを目指して、ボートに関するあらゆる分野をバランスよく発展・向上させることが必要です。それが結果的に、悲願のオリンピックでのメダル獲得につながる正道だと、あらためて認識させる忠州でのアジア大会ボート競技でした。

末筆ながら、アジア大会への派遣に際してご協力を賜りました、多くの皆様に心から御礼を申し上げます。

☆ご意見・ご感想をお寄せください。千田隆夫 E-メール: tsenda@gifu-u.ac.jp



2014 仁川アジア大会の開会式。アジアのオリンピック“アジア大会”は、次回は 2008 年にインドネシアで開催される。